

牧師室から(2022.5.22)

千葉県船橋市の実家に往復する日々が続いている。義父の病の介護ではあるが、何よりも義父母の食事のことが一番の問題である。結婚前に夕飯に誘われて鈴木牧師の家に訪れた時は、義母の手作りの美味しそうな料理が食卓に並んでいた。また、食べるのがもったいないくらい、きれいな形をしていた。初めての対面で緊張していながらも、その美味しさに次々と口に入れていた。義父母は何と食欲旺盛な娘であるのだろうと思っていたのに違いない。

しかし、今の義母は簡単な料理を作ることさえ、億劫になるくらい衰弱している。本当に寂しい。しかし、私が何を作っても、「おいしい、ありがとう」と二人で喜んで食べてくれるので、それだけでも幸いな気持ちである。海老名に帰る時は、温めて直ぐ食べられるように、豚汁やシチューなどの煮物を多めに作っておくことが多い。この間はカレーを作っておいた。「残ったら、うどんにして食べると美味しいよ」と鈴木牧師が言うと、「そうね、ありがとう」と笑顔で義母が答えた。

私はカレーには主に豚肉や鶏肉を入れるが、関西ではカレーというと、牛肉が主類である。「えっ、カレーに豚肉を入れるんですか？」と驚くように言われたことがある。

5月19日の「東京新聞」の「筆洗」というコラムに誰かが（筆者の名前が書かれていなかった）書いた文を読んでみたら、日本で初めてカレーのレシピが紹介されたのは1872年であるようだが、そこにはカエルの肉を使っていたらしい。筆者も驚きであると書いているが、それだけではない。玉ねぎが広がる前だったので、今はカレーというと当然入れるべき玉ねぎではなく、ネギを使って調理をしていたようだ。面白い話である。

結構前のことであるが、友人がタイの旅行から帰って来て、タイの料理をふるまうからと、招待されたことがあった。とても美味しかった。お茶を飲みながら、タイの話聞く中で、さっき食べた肉が何か分かるか、と言われた。「鶏肉じゃない？」と言うと、「カエルの肉なの、先に言わなくてごめんなさい」といたずらっぽく言った友人にどういえばいいのか戸惑うしかなかった。勿論のことだが、料理には食べるということだけではなく、いろいろな思い出が共にある。

そして、主イエスの食卓では何の料理があったのだろうかと思い巡らして見ながら、次のみ言葉が頭に浮かんだ。「主イエスは言われた。『わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである。』（ヨハネ4：34）」

この頃の私は、何を食べるかということだけに思いを馳せているようで、主イエスに申し訳ない気持ちである。

(鈴木善姫牧師)